

## SHORT ESSAY

# かなにふりがな

## 池内 恵吾

Keigo Ikeuchi

いけうち・けいご フジテレビおよびテレビ愛媛勤務を経て、現在バームクリエイティブ顧問。放送批評懇談会会員。俳句雑誌「春耕」同人会長。

「月日は百代の過客にして、行こう年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむこうる物は、日々旅にして旅を栖とす。」

「ご存じ『おくのほそ道』の冒頭ですが、どこか変ですね。そう、芭蕉の文章が、歴史的かなづかいから現代かなづかいに直されています。実はこれ、たゞいま刊行中の『週刊おくのほそ道を歩く』（角川書店）に使われている本文です。芭蕉の旅を、出発地の江戸深川から終着点の大垣まで三十冊に分けて紹介する企画ですが、写真は美しいし解説も楽しく、わたしも毎号愛読しております。ただ、〈多くの人に芭蕉の作品に親しんでいただくため、より読みやすいように原文を現代かなづかいに改めています〉という点が、どうも引っかけなのです。」

歴史的かなづかいは、平安中期以前の文献のかなの用法には混乱がないので、それを基準に江戸時代に契沖が定めたもの。芭蕉はもとより、子規や漱石も使いました。現代作家でも、阿川弘之氏や丸谷才一氏は歴史的かなづかいを墨守しておられま

す。わたしは岡先生の熱心な読者ですが、おふたりの小説やエッセイを、かなづかいのゆえに読みづらいつと感じたことは一度もありません。

若い読者のためという理由で、かなづかいに手を入れることは、岩波文庫あたりから始まったようですが、岩波は原文が文語体の場合は歴史的かなづかいのままにしており、さすがに芭蕉にまでは手を出していません。このたびの『おくのほそ道』は、読者への親切を通り越して原文破壊になるのでは、と心配したくなつてしまします。

では、どうすればよいのか。原文の歴史的かなづかいの部分に、現代かなづかいでルビを振るとするのはいかがでしょうか。『おくのほそ道』の冒頭でいえば、「行かふ年」の側に「ゆきこうとし」、「馬の口とらへて老をむかふる物」には「うまのくちとらえておいをむこうるもの」というように、かなにもふりがなを振るわけです。現にわたしは、この方法で放送原稿を書いています。若いアナウンサーも歴史的かなづかいを正確に読んでくれています。